



年輪のなほい木



佐木隆三

講談社

年輪のない木

一九七四年二月十二日 第一刷発行

著者 佐木隆三

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二

郵便番号 一一二

電話 東京(九四五) 一一一一

振替 東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Saki Ryuzo, 1974 Printed in Japan

定価はカバー及び帯に表示しております

(文1)



目次

初めての街で

5

珊瑚礁の島で

69

暴風圏の島で

175

渇水の島で

221

装帧

山岸
義

年輪のない木

初めての街で

パトロールカーが到着するまでのあいだ、わたしは通行人に取り押えられた恰好であったらしい。らしいというのは、かなり酔っていたせいもあるが、なにしろ事態が思わぬ方向へ動き出したことに狼狽して、状況認識ができなくなっていたからである。駅のすぐ近くの商店街で、八百屋の前にある四角い郵便ポストに押しつけられるように、立たされていたのだった。初めのうちわたしは、「おまえらに関係ないよ」と大声を出し、取り囲んだ男たちに体当たりを試みたものだったが、あっさりはじき返された。四人ないし五人の男たちは連れだって通りかかったのではなく、それぞれ帰宅を急ぐサラリーマン風であったけれども、よく協力しあっているように見えた。実力で逃れるのを諦めたわたしは、こんどは顔を上げて彼らのひとりひとりに言った。「あなたたち、どういうつもりですか　これは要するに夫婦ゲンカなんです、あなたたちに関係ありません」。しかしすぐ、「だって暴力をふるったじゃないか」「言いたいことがあれば警察で言うんだな」というような答えがはねかえってきて、囲みが解ける気配はないのだった。それでわたしは、もとの乱暴な言葉づかいに戻り、「おまえら、犬よりもくだら

ない連中だな、ほら、夫婦ゲンカは犬も喰わないって言うだろ」などと悪態をついたものだが、よく殴られずに済んだものだ。もっとも彼らはみんなきちんとネクタイを締めて、背広の袴に社章らしいハッシをつけた者もあり、午後十時過ぎて酒に酔うでもなく帰宅中のサラリーマンだから、積極的にリンチを加えるようなこともあるまいとこちらも計算はしていた。そのなかの一人が、「場所ちゃんと言明したの？」と八百屋の店先に向かって声をかけ、主人と思われる男が「やがて来るはずですがね」と答えたりもした。商店街の連中は最初から、傍観者の態度に終始しているようだった。わたしを取り押えた男たちの要請で、しかたなく一一〇番へのダイヤルを引受けたというふうには振舞っている。

京子はちよつと離れたところに立ち、ハンドバッグを両手で提げて泣いていた。状況が固定したあとで通りかかった人間が見たら、なにかの不都合があつて警察に引き渡されようとしている男を、連れの女がなす術もなく見守っている図に映ったにちがいない。手ばなしで泣いている恰好の京子は、被害者がこの場から居なくなつたのでは救ってくれた通行人に申し訳ないと思つて立ち去らなかつたのかもしれない。しかし、だれかが横に立つて事情でも聞きながら保護するかたちでなく、京子ひとりが放っておかれていたのだった。パトロールカーが早く来ればいいのに、と京子を見ながらわたしは考えた。別居中とはいえ夫婦であるわたしたちが、こんなかたちでさらしものにされている。京子がこんど借りたアパートは、この商店街を通り

すぎたところにある。引越して三ヶ月近くになるから、もう顔は憶えられているだろう。そしてわたしも、ここを歩いてアパートへ行くのである。二人の息子も買物に来ることがあるだろう。なんとか早く、この場から逃れたい思いは、京子にしたところでおなじであったにちがいない。ただ、二人とも酔っているのが、せめてもの救いなのだ。わたしが酔っている以上に、京子も酔っているはずだからである。

わたしたちは、京子のアパートでウイスキー水割りを飲み、そのあと駅の近くの寿司屋に来てビールを飲んだ。夕方になって、なにか仕事に関する連絡がなかったかを聞くために彼女のアパートへ電話したら、京子は「なんにもないようだわ、私も帰ったばかりだからわからないけど」と答えた。二人の息子は、夏休みで九州の実家へ遊びに行っている。留守番をかねた下宿人である大学生の岩見久代も、北海道へ帰省しているという。「それで、なにしてる？」とたずねたら、「咽喉が乾いたから水割りを飲みはじめたところなの」と京子は言った。それを聞いたからといって、わたしが京子のアパートへ行くことはなかったのだ。こないだ沖繩から出てきた学生が、スカッチウイスキーを土産に買って来ている。自分のアパートでそれを飲むか、行きつけの新宿のバーでどれか知合いが来るのを待って飲んでいけばよかったのだ。しかし、わたしは私鉄駅で四つ離れている京子のアパートへ行った。なるほど京子は、一人でウイスキー水割りを飲んでいて、「あなた宛のお中元だけど、栓を開けたところなのよ」と言い、

わたしは、「そんなことだろうと思つて来てみたんだ」と応えながら部屋へ上がりこんだのである。その部屋は、岩見久代が使っている六畳間であった。

別居生活をはじめてすぐ勤めに出るようになった京子は、求人広告を出して留守番を募集した。そして、四年生なので週に一度だけ学校へ出れば良いという女子大生の岩見久代に決つた。彼女は寮に居たくない事情があるとかで、こんなかたちの下宿を選んだのだが、居ないはずの亭主であるわたしのかかわりにとまどっている様子だつた。別居することになり以前の借家を出るとき、電話は京子のアパートに移転させた。わたしも、おなじ私鉄沿線に、古いがちりちりした鉄筋の1DKアパートをみつけたのだが、このあたり電話の新設は申込んで二ヵ月以上かかる。それで、京子のアパートを連絡場所にした。電話を移転させたばあい、三ヵ月間は電話局のサービスで、従来の番号にダイヤルすると、「この電話は次の番号にかかりました」と交換台の録音テープが告げる。そのサービス期間中に、わたしのアパートに新しい電話がつく段取りで、すでに番号も決つた。それが開通してから、移転通知のハガキを出すつもりであるのだ。郵便物も同様に、とりあえず京子のアパートへ転送してもらつてゐる。岩見久代は、かつてきた電話がわたし宛のものだつたら、「いま仕事場です」というふうに答えて、用件を聞いてくれている。そして、一日に一回電話を入れるわたしにそれを伝えるのだが、京子のつもりでつい、「それで急いでいる様子だつた？」などとたずねると、岩見久代は「さあ……」と口

ごもるだけだ。だから京子に、「こんなむづかしい役目があるとは知りませんでした」と暗に抗議をするらしい。それに、かかってくる電話で、「奥さんですか？」と問われて、狼狽することもあるそうだ。京子の声を知っている人物など岩見久代に、「すると、あなたが新しい奥さんですか」と話しかけたりもする。わたしがほぼ一年前から、別れる別れるといって荷物をかかえて知人の家やホテルを泊り歩いているからだ。

京子のアパートでウイスキーを飲みはじめてしばらくは、岩見久代のことなど話題にして穏やかだったのだ。いま夏休みで居ないが、日頃は夜になるとかならず男から電話がある。留守番は昼間だけの約束で、夜間は彼女の自由だから、たいてい出かけて行く。かかってくる電話は二人からで、適当にローテーションを組んでデートの相手を選んでいるが、朝帰りすることもあるとか。京子は、「いまごろの若い人ってすごいわね」とつけ加え、わたしもまた、「へえ、あんな温和しそうな娘がねえ」と相槌を打つのだ。京子が三十一歳で、わたしは三十三歳である。すでにこんな世間並みの会話をする中年夫婦になったのか、とさりげなく京子の顔を見て苦笑した。もつとも、苦笑というより、微笑であったかもしれない。

久しぶりのその穏やかな笑いに、おそらく京子は油断したのだ。水割りのための氷が切れ、それを取るために京子が台所へ立ち、冷蔵庫をゴトゴトやりはじめたとき、こちらの部屋に置いたままのハンドバッグに、わたしは気づいた。手早く開けて、すぐ見つけたのが、一枚のカード

だった。これは会員制バーの、メンバーカードだった。所有者の名前がローマ字でタイプされたカードを見ているところへ、京子が氷を盛った容器を手に部屋へ戻って来た。「なにしているのよ、卑劣な！」と叫んで、京子はわたしの手からカードを奪い、すぐハンドバッグにしまいこむと背後に隠すように持った。「卑劣だって？　これまであんたがやったのとおなじことをおれもやったまでさ」とわたしは切りかえした。「ハラダってどれだい？」「私が適当に使っている名前よ」「だめだよ、誤魔化しても」「嘘じゃないわ」「だって、ミスター・ハラダってなっている」「課長から借りたのよ」「へえ……」「課長の名前のキーボックス、私たちが接待用に使って構わないことになっているの」「じゃあ、自分の名前にしたらどうなんだい」「そうね、こんどからそうするわ」。そんなやりとりのあと、立ったままの京子が、「帰ってちょうだい」と言った。「いいじゃないか、どうせおれのウイスキーだ」とわたしは応え、持って来たばかりの氷をグラスに落す。「そんなら持って行ってよ、あなたの部屋で飲めばいいでしょ」「どこで飲もうとおれの勝手だろ」「そうはいかないわよ、ここは私の部屋だから」「へえ、だれの金で家賃を払っているんだい」「いいわよ、いまにあなたの金なんかアテにせずに生活してみせるから」「じゃあ、それまでは文句いうな」。なぜこんな理不尽な言葉が飛び出すのか。わたしは自分をもて余し、それでもなおなにか言葉が出そうなのを押えるためにウイスキーを口に運ぶ。そして、嫉妬心というものの理不尽さについて、わたしなりに考えようとしたはず

なのだ。離婚を前提に別居生活をはじめていながら、いまさら京子のハンドバッグをさぐって、どんな想像力をかきたてようというのだろう。しかし京子は、そんなわたしに不気味なものでも見るような目を向け、「私これから出かけるのよ」と言った。京子にしてみれば、わたしを帰すための方便だったかもしれない。だが、わたしはそれでふたたび、己れの理不尽さを増幅させるのだ。「へえ、お遊びの時間？」「なんでもいいでしょ」「おれは、あんたが遊びまわる金のために働いているのかなあ」「安心してよ、遊ぶときはちゃんと相手に払わせるから」「へえ、ほんとうかい」「あなたとおなじで、自分の女房にはハンカチ一枚買うのも惜しむくせに、遊び相手に使う金は惜しまないバカな男が多いのよ」「けっこうなことだな」「き、出かけるわ」。京子が勤めから帰って着換えもせずにウイスキーを飲んでいたのは、後で出かけるつもりだったからかもしれない。「いいき、出かけよう、おれも新宿に用があるんだ」と言って、わたしは立ち上がったのだ。

京子とわたしは、連れだってアパートの部屋を出た。京子が玄関の鍵をかけるあいだ、わたしは裏手にまわり、犬小舎を覗いてみた。デパートで買ったとき生後二ヵ月だったアイヌ犬は、いま六ヵ月になっている。別居生活をはじめると決めたとき、息子にせがまれて買ったのだ。初めわたしは、自分だけが家を出ればいいと思っていた。しかし京子は、「この家には厭な思い出しか残っていないし家賃も高すぎるから」と、自分もアパートさがしをはじめた。

小学校三年生と幼稚園年長組の息子たちには、離婚のことを話していない。わたしが仕事に専念するため、他所に部屋を借りると言っているのだ。父親の職業について、二人の息子がどのように考えているかはわからない。ただ、やたら旅行をし外出をし、家に居て机に向かっているときはわけもなく怒鳴るのが仕事だと思っているようなのだ。夫婦ゲンカの頻度が高くなり、用心はしていてもつい息子たちの前で罵りあうこともあった。そして酔った勢いで、まだ起きていた上の息子に、「パパとママは別れるが、おまえはどっちといっしょに暮すか？」とたずねたりもした。息子は、黙って自分の部屋へ行った。行くとき薄笑いを浮べたので、くだらぬ夫婦ゲンカを冷笑したのだろうと思ひ、どこか小面憎くさえ感じた。二時間くらいたつて、ちゃんと蒲団をかぶっているかどうかを見るために子供部屋へ行ったら、二段ベッドの上段で丸くなっていた。寝相を直すつもりで蒲団を引っ張ったら、上の息子は何やら叫んでふたたび身体を丸くした。見ると顔中が涙で濡れて、泣きじゃくっていた。眠ることもできず、二時間もそうしていたにちがいない。さすがに胸がしまったが、いまさ「嘘だよ」とも言えず、わたしはそのまま寝た。そのようなあと、しばらくは平穏だったが、やがて別れ話は再燃する。別居することを決めて、父親が仕事場へ移ると話したとき、おそらく上の息子は事情を察したのだろう。べつに反対もしなかったが、「犬を飼っていいでしょ」とねだりはじめた。同級生が犬を連れて遊びに来るたびに、息子二人は犬にかかりきりでいた。一戸建ての借家だ